紫波町コミュニティ・スクール通信

紫波のＣＳ

令和４年１２月　第３号

発行：紫波町教育委員会学校教育課
TEL019-672-2111（内線 3122）
文責：ＣＳコーディネーター　佐々木　勉

令和4年度 紫波町学校運営協議会推進シンポジウム

令和４年１２月３日（土）午前１０時から紫波町情報交流館大スタジオにおいて「令和４年度紫波町学校運営協議会推進シンポジウム」が、参加者およそ６０名（町教委担当含む）により開催されました。

開会行事では、紫波町教育委員会侘美淳教育長から「紫波町では小中一貫の取組と並行し学校運営協議会制度導入を進めてきた。今年度すべての学校で学校運営協議会制度が導入されたが、まだ移行期である。本日シンポジウムの目的として学校運営協議会制度の理解と今後どのように進めていけばいいかということについて実践を含めて考えていく機会としたい。」との挨拶がありました。以下、内容等についてお知らせします。

行政説明　岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課　主任指導主事　阿部　勲寿　氏

「岩手県コミュニティ・スクールの現状と課題 ～みんなで進めるコミュニティ・スクール～」

コミュニティ・スクール（以下 CS）の推進を国では市町村が中心となることを薦めています。紫波町では侘美教育長が中心となって CS を推進していく素地があると捉えています。

学校運営協議会において委員は、サッカーで言えばサポーターではなくスタッフとして一緒に選手を支える役割を果たすことが求められています。委員は学校の状況により、社会福祉士が委員を務めたり、重点取組を「防災」としたりするなど、目指す子ども像や学校経営方針について地域・家庭と連携して確認していくことが大切です。　学校運営協議会で熟議されたことを実践するために「地域学校協働活動」を実働部隊として整備し、二者(学校運営協議会と地域学校協働活動)がそれぞれの役割を果たしながら活動することと二者をつなぐ「地域学校協働推進員（コーディネーター）」の役割が重要です。国・県としてもこの二者の連携促進に重点的に取り組んでいます。県の行っている教育振興運動も「地域学校協働活動」にあたり、子どもの体験的な学びを進める母体である市町村もあります。大学入試制度改変では体験的な学びを重要視する傾向からも、地域の様々な方との交流による体験的な学びの充実が期待されています。

国では、学校運営協議会で新たな課題について協議するよう勧められるとともに、委員について多様な人材が求められています。県内では、２４市町村が域内すべての小・中・義務教育学校に CS を導入しており成果をあげています。

全国の事例では教職員の働き方改革・生徒指導事案対応・震災後の地域コミュニティ再生と地域に開かれた教育課程の作成などの導入の成果や、校長先生・副校長先生対象のアンケートでも導入による良好な回答が報告されています。

最後に、良い地域に良い学校が育つといわれています。CS 導入で地域も学校が元気になること。また地域で活動する大人を子ども達が見て地域の良さを再確認する場となっていることも期待されますので、今後も取組を進めていただきたいです。

シンポジウム　シンポジスト　紫波西学園学校運営協議会　西の杜小学校　校長　佐藤　謙司　氏

まず、小学校の活動についてお話します。成果として①スクールバス停留所の除雪　②小中 9 年間を見通した小中一貫教育　②総合的な学習「ふるさと学習・米作り」　③登下校の安全を守る取組⑤学習支援活動：「ミシン学習支援」「川の水質調査」「バケツ稲の指導」　⑥読み聞かせボランティア「杜のくまさん」　⑦面白工作教室、習字教室　⑧コミュニティ・スクールの周知・理解「校報」や「CS 通信」の発行とホームページによる周知⑨「小学校の子ども会活動」「吉里吉里小学生との交流」などがあげられます。課題として　①広く地区住民の意見を反映させること　②幼保小中連携を図るため、あづま幼稚園、虹の保育園との交流を促進したいです。

あづまねカフェで、ゲストティーチャーと交流

次に中学校の実践です。①「コミュニティの日」水分公民館で「酒の学校」と関連した酒瓶のラベルつくりと志和公民館で「片寄小学校跡地利用」を考えるワークショップから、「ふるさと学習」第１時目へつなぎました　②60 周年記念事業を、「春のあづまねカフェ」として実施し、多様な地域人材 20 名をゲストティーチャーとして協力願い、中学生との小グループによる対話による学びを「ふるさと学習」へつなぎ授業参観日に成果を発表しました。結論として①地域を頼ること②子どもを地域に委ねること③学びをみんなでつなぐことが肝要であると考えました。

シンポジウム　コーディネーター　宮城教育大学学長付特任教授　CSマイスター　野澤　令照　氏

１　紫波西学園の実践は CS の本質を捉えた素晴らしい活動

「紫波西学園学校運営協議会」では、CS の本質を理解したうえで、学校だけでなく地域の方と一緒に学校の教育を考えながら、カリキュラムの中に位置付け、９年間を見通した小中一貫教育がきちんとなされていることが素晴らしいです。さらに、地域住民の方と中学生が地域課題の解決を目指し、町全体を良くしていこうと中学生が大人と一緒に考えているということに驚きました。学校運営協議会で様々な提案が出され、我々に何ができるんだという協議から、実現されているということも素晴らしいです。加えて、公民館活動が充実しているからこそ「あづまねカフェ」で２０人の講師が集まったことは、長年培われてきた紫波町公民館の強みです。ある学校で、学校の先生方と委員の方々で話をしたら、先生方が本音を語るようになってきた事例がありますが、佐藤校長先生の「紫あ波せトーキング」は、先生方のためにも実現できることを願っています。

２　CS 導入で、ますます「いい学校」「いい地域」へ

さて、紫波町では今年度すべての学校は CS になりました。本来であればまだ導入期や理解を広めていく時期ですけれども、私の印象としてはほぼ充実期に入っている感覚です。ただここで功を焦らずに一歩一歩成功したことだけをみんなで喜び、楽しみながら進んでいってほしいと思います。教育振興運動という伝統が岩手の中にあることが全国的に自慢の出来るアドバンテージとして、もっていることを感じます。実際に CS では、本気で生きている大人の人と出会うことで子どもは成長する、地域で子どもを支えることで、地域も子どもから元気をもらえると考えます。学校教育目標を作る際、先生方の願いに保護者や地域の方々の思いを加えていく。全国の学校を回って、いい地域だなと思えるところにある学校で悪い学校って見たことがない。逆に、いい学校がある地域は、いい地域だなと常々感じています。

３　地域学校協働活動で大人も子どもも一緒に成長しよう

「ふるさと学習」では、従来あったものを整理しまとめ実践することで、大人がつながる良い事例です。大人が地域づくりのために学校へ集まり、子どもを交え未来を話し合う。そこに先生も加わり考える場が学校運営協議会と理解いただき、地域とともにある学校をもっと骨太のものにすることが、今から目指すものと捉えていただきたいです。

地域学校協働活動では、紫波町らしさや伝統を大事にすることで、新しいつながりが必ず出てきます。子どもは地域の素晴らしい人との出会いで地域の良さを実感し、一度紫波町を離れても、戻りたいと思う子どもが確実に育つと考えます。子どもも大人もともに成長する「大人と子どもが一緒に」がキーワードです。今の教育では、主体的な学びを大事にし、自ら見つけた課題を自分の力で解決をし、発信していくことを大事にしています。紫波町図書館でやっている「調べる学習」も素晴らしいです。そういった土壌や、今ある素材を大切に進めていっていただきたいです。

４　まとめに

「地域とともにある学校」は、目標を共有する場、そして学校を核とした地域づくりです。地域を担う人材が育成され、子どもと大人が学びあい育ちあう教育の体制を構築し、さらに次の時代につながっていく。大事なのは、地域の大人が生涯学習を実践し、大人の自己実現につながるという意識をもって行うことです。これからの時代は、「社会総がかりで教育をする」「大人も子どもとともに元気になる」そういう町づくり・地域づくりにつなげる教育を、子どもを中心に進めていただけたらと感じているところであります。